

2023年3月14日

2022年度 ALL DOSHISHA 共修プログラム
実施プロジェクト成果報告書

プロジェクトタイトル	
Feel Japan ~Understand Japan through Japanese culture~	

プロジェクトメンバー			
役職	氏名	学科専攻	学年
リーダー	加藤潤	機械システム工学科	B2
サブリーダー	光高圭亮	機能分子・生命化学科	B1
	小峠雅	機械システム工学科	B1
	三浦果穂	化学システム創成工学科	B1
	Abalos Jose Gabriel Faustino	電気電子工学専攻	M1
	Mondragon Vazquez Carlos Omar	機械工学専攻	M2

支出経費			
支出項目	単価 (円)	数量	小計 (円)
編集費	65000	1	65000
追加編集費	5000	1	5000
ディレクション費	50000	1	50000
撮影費	80000	2	160000
BGM	5000	2	10000
合計			290000
消費税(10%)			29000
総合計			319000

プロジェクトの目的と狙い
同志社大学に留学を考えている海外の学生の中には母国の文化と日本の文化の差に不安を抱えている学生がいる。そのため、同志社大学内での日常生活を通して体験する日本の文化を伝え、実際に留学に来た際に日本特有の文化に困ることなく、生活できるようにすることを目的とする。

プロジェクトの実施内容（1 ページ以上）

- 取り組んだ実施内容を時系列にかつ具体的に記入してください。
- 誰がどのような役割で何をしたかも分かるように記入してください。
- 適宜、取組状況の画像データを貼付いただいても結構です（様式の半分以内の分量とします）。

最初の話し合いでは全員でブレインストーミングを行い、互いの意見を出し合った。その上で会議終了後、自分の意見を整理し、企画メモを全員が作成した。なお、企画メモを作る際にはプロジェクトの趣旨をしっかりと捉え、「同志社大学理工学部 of の学生ならではの視点」と「自分たちの力でやり遂げられるかどうか」の 2 点に特に重点をおいて作成を行った。

その後、この企画メモをもとに議論を重ね、最終的に日本の文化を伝えるチームと留学生の生活を伝えるチームに分かれて活動を行うことになった。

ここからは我々文化チームが行ったプロジェクト内容を具体的に記述する。

大平印刷株式会社のワークショップにおいて我々は同志社大学理工学部の「強み」や「弱み」について SWOT 分析を用いて明らかにした。そのデータをもとに、このプロジェクトで扱う内容のコンセプトを考え、文化チームは外国人留学生との「共存」に決定することにした。次にこの「共存」という目標を達成するために我々に何ができるかを考えた。その結果、留学後に日本特有の文化で困ることがないように、大学での日常生活における日本文化を伝える動画を作成するという結論に至った。

動画作成にあたり、初めに動画構成についての話し合いを行った。まず、誰に向けた動画にするかについてだが、当初は海外から日本に留学を考えている学生、日本から海外に留学を考えている学生の両方を対象にしようと考えていた。しかし、それだとあまりにも対象者の範囲が広すぎたため、最終的には海外から日本に留学を考えている学生に対象を絞ることにした。次に撮影するシーンを決定した。我々は文化チームということもあり、同志社大学理工学部で生活していく上で日本の文化をよく感じる瞬間をいくつかピックアップして動画にすることを決めた。具体的には挨拶の文化と食事の文化をメインにすることとした。また、それとは別にチーム内に留学生がいるという利点を活かし、留学生へのインタビューシーンも取り入れることで同志社大学の魅力をより外部へ発信できるようにした。

ここから先は実際に動画を撮影する準備の段階であるが、これ以降は一人一人に役割を振り分けて活動を行った。まず、リーダーの加藤が中心となり、動画の撮影を行う上で許可が必要な建物や研究室にアポ取りを行った。また、動画に関しては大平印刷株式会社はその撮影及び編集を依頼していた。そのため、撮影当日にディレクターやカメラマンの方がしっかりと撮影工程を把握できるように、撮影時のスケジュールを記載した香盤表を小峠が作成した。また、編集に関して動画の一連の流れがしっかりと分かるような絵コンテを三浦、光高、Gabriel の 3 人で作成した。

動画内で読み上げる原稿の作成に関しては、まず一人一人に担当箇所を割り当て、動画の内容に沿った解説文を英語で作成した。その後 Carlos、Gabriel の 2 人に英文の誤っている箇所がないかを確認してもらい、完成に至った。

その後、11 月末と 12 月初旬に実際に撮影を行った。11 月末の撮影では我々が撮影に慣れていないということもあり、ディレクターやカメラマンに頼りきりになってしまう部

分が多くあった。それをチーム内での反省材料とし、12月初旬の撮影ではスケジュールの段取りやカメラの画角に関してチームのメンバーが率先して意見を出しながら撮影を進行した。

12月中旬以降から大平印刷株式会社に編集を依頼し、出来上がった動画に関して校正を行った。校正の主な内容としては動画内の英語字幕の修正や画面表示時間の変更を行った。6度の校正の後、2月上旬に動画完成に至った。

プロジェクトの成果（1ページ以上）

●当初計画していた達成目標と比較して成果を記入してください。

●プロジェクト開始時からどのような能力が向上したかを記入してください。

・グローバルマインドの3要素（①グローバルな視野、②多様性の尊重、③異文化理解）

・社会人基礎力の3つの能力と12の能力要素 ①前に踏み出す力（主体性/働きかけ力/実行力）②考え抜く力（課題発見力/計画力/創造力）

③チームで働く力（発信力/傾聴力/柔軟性/状況把握力/規律性/ストレスコントロール力）

●当初計画していた目標に至らなかった場合は、①何が実施・実現できなかったのか。②その要因は何か。③考える解決策 を具体的に記入してください。

プロジェクトが始まった当初は何を行うかを話し合う以前に留学生とコミュニケーションをとることに苦戦した。私たち日本人は留学生に比べると控えめであり、話し合いのほとんど全てにおいて留学生の意見に圧倒されて意見を述べる事が出来なかった。その中でプロジェクトを統括して下さっていた事務室のスタッフの方から日本語でも良いので積極的に意見を出すことを意識するようにアドバイスを受け、その後はとにかく恥を捨てて何とか意見を伝えようと必死になった。この姿勢の変化が発信力の向上に繋がったと大いに感じる。

また、チーム内では週に1回必ずミーティングを開き、そこでお互いの意見を出し合うことにしていた。このミーティングを設定することでしっかりとチーム内で情報把握をすることができた。さらに毎回出る様々な意見を決して否定することなく、しっかりと受け止めたことで傾聴力や柔軟性も併せて身につけることができた。

プロジェクトを進行していく中で困難に直面する場面も非常に多くあった。中でも特に決断に困った1つを取り上げる。それは動画の対象を「海外からの留学生」に絞るか「海外への留学を考える日本人学生」も含めるかという問題である。最終的には情報が過多になってしまうという理由で、「海外からの留学生」のみに対象を絞ることに決めたが、それによってメリットとデメリットが両方生じてしまった。メリットは対象者が狭まった分、より深い内容を伝える動画を作成できたことである。その一方でデメリットとしては、日本人にはよく知られている文化について伝える動画のため、日本人学生からすると興味が減ってしまうような内容になったことである。しかし、動画の尺の問題や製作時間の問題から全てを伝えることは非常に困難であったため、このように対象者を絞って、伝える情報を取捨選択することは良い判断であったと考える。「答え」というものが明確にない中で本当に伝えたいことだけを抽出すること、そのために時には情報の取捨選択を行うことの重要性をこのプロジェクトを通して実感することができた。

最後に当初計画していたが実現に至らなかったことを述べる。チーム別に分かれ、動画を作成することを決めた時点では、メンバーの中に編集ソフトを持っている人がいたこと

から、撮影から編集まで自分たちで行おうと考えていた。しかし、途中でこの計画は断念せざるを得なかった。理由としては編集を担当できるメンバーが 1 人しかいなかったこと、撮影時期の関係で編集を行う期間が期末試験期間と一致してしまったことが挙げられる。考えうる解決策としては撮影時期と編集時期をもっと早めることなどが考えられるが、そうなった場合、今度は動画の構成を考える時間が短くなり、中身の薄いものになってしまう危険性がある。あくまでも最終目標は同志社大学工学部の魅力を世界へ発信することである。そのため、編集を最終的には企業の方をお願いすることにはなったが、内容の構成をしっかりと時間をとって考えられたことは非常に良かったと感じる。以上のように今回のプロジェクトでは本当に多くの成果を得ることができた。このプロジェクトで得た経験をこれからの人生に存分に活かしていきたい。

今後期待できる成果の波及効果（1 ページ以内）

- 今後、成果物を大学がどのように活用することが望ましいかを記載してください。
- 成果物をさらに波及するための考えうる取り組みを記載してください。

留学生が同志社大学での生活において触れる日本文化を知り、同志社大学へ留学を考える一つのきっかけになると考えられる。それだけでなく、このプロジェクトが存在することを同志社在学中の日本人学生も知ることができるため、より国際化につながる。この動画は主に日本文化を扱う部分と海外からの留学生の実際の声を届ける部分という 2 つの柱で成り立っている。外国人の中には日本文化に興味はあるものの、同志社大学という存在を知らない人が一定数存在すると考えられる。そのため、この動画をただホームページ上にアップロードするのではなく、「日本文化」というキーワードと結び付けて、海外の人の目につくようにすることが望ましい。具体的には、動画に「日本文化」等のキーワードをハッシュタグとして取り付けることで、この分野に興味のある外国人に行き届きやすくする、といったことが挙げられる。こうすることで、日本文化に興味をもった外国人が同志社大学の存在を知るきっかけになる。今回作成した動画を通してより多くの人に同志社大学のことを知ってもらえることを強く望む。

成果物をさらに波及するための別の取り組みとしては学内の掲示板や海外の他大学にも動画をシェアし、同志社大学の魅力を発信する場を増やしていくことも挙げられる。